

# 小学校の外国語（英語）活動の指導法

## －教材としての児童文学－

鯨坂 はるよ\*

### Teaching Methods of English Activities in Elementary Schools

－Juvenile Literatures as Teaching Materials－

Haruyo Ajisaka

---

【キーワード】 小学校の英語活動, 指導法, 教材, 児童文学, 絵本  
English activities in elementary schools, teaching methods,  
teaching materials, juvenile literature, picture book

#### 1. 研究の背景と目的

平成 29 年 3 月 31 日、幼稚園・小学校・中学校の新学習指導要領が告示された<sup>1)</sup>。『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』によると、小学校では、平成 23 年度から高学年において外国語活動が導入され、児童の高い学習意欲、中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった成果が認められている。一方で、①音声中心で学んだことが、中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない、②日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある、③高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められることなどが課題として指摘されている。また、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて児童生徒の学習意欲に課題が生じるといった状況や、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学した後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができないといった状況も見られている。こうした成果と課題を踏まえて、小学校中学年から外国語活動を導入し、「聞くこと」「話すこと」を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに、中学校への接続を図ることを重視され、平成 29 年 3 月 31 日、幼稚園・小学校・中学校の新学習指導要領が告示された（文部科学省 2017：6-7）。

平成 29 年 3 月 31 日に告示された小学校学習指導要領では、小学校第 3 学年、第 4 学年で外国語（英語）活動として授業が行われることとなり、また小学校第 5 学年、第 6 学年で外国語（英語）が教科となった。これにより、授業時間数が増加し<sup>2)</sup>、外国語活動から教科への移行は、小学校の学級担任への負担が増すことになる。平成 19 年度の文部科学省「小学校英語活動実施状況調査」<sup>3)</sup>によると、英語

---

所属および連絡先

\* 大阪千代田短期大学

活動を実際に指導しているのは誰かという質問に対し、「学級担任」「英語指導担当教員」「中・高等学校の英語教員」「特別非常勤講師」「その他（校長・教頭など）」の5項目のうち、各学年とも「学級担任」が最も多く、9割を超えている。小宮（2009）はこの結果を踏まえ、小学校の担任は算数・国語といったこれまでの教科に加えて「英語」という怪物と戦わねばならないわけで、幅広い教科の指導を求められることすでに過重負担となっている小学校教諭に、さらなる負担が加算されていることへの懸念は大きいと述べている。鳥飼（2018：147）も、英語の専門家が揃っていない小学校で誰がどのように教えるのだろう、という懸念は残ると述べている。今後、この外国語教育の変化に対応するために小学校の英語教育を検討し、より深めていく必要がある。また、小学校第3学年、第4学年で外国語（英語）活動として授業が行われ、小学校第5学年、第6学年で外国語（英語）が教科となることにより、より一層、英語の早期教育熱が高まり、小学校入学前から子どもに英語を学習させる親が増加し、幼稚園、保育所、こども園で英語を子どもに学習させてほしいという親の要望増加の一途は間違いない。

それでは、小学校の授業で、どのような教材を活用すれば良いのだろうか。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』の小学校第3学年、第4学年で外国語（英語）活動の内容の[知識及び技能]の「言語活動及び言語の働きに関する事項」の「聞くこと」の中に、動作やイラスト、写真を添えたりするなどして、理解を促す手立てを講じ、「聞いて分かった」という喜びや達成感を味わわせることが重要である。そうした点において、絵本を活用した読み聞かせなども有効である（文部科学省 2017：29-30）、と述べられている。

小学校第5学年、第6学年で外国語（英語）活動の内容の「言語活動及び言語の働きに関する事項」[①言語活動に関する事項]では、「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」について述べられ、「読むこと」の中に「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動」が挙げられている（文部科学省 2017：100-105）。

また、「小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」では、小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）を教える教員に、英語に関する基本的な事柄（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）について理解している、第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している、児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）について理解している、異文化理解に関する事柄について理解している、等を目標としている。

本稿では、小学校教員はどのような児童文学（絵本）の知識を持ち、また小学校で、教材としてどのような絵本を取り上げたらよいのかということに焦点を当て、検討を行う。

## 2. 児童文学を学習・活用する意義

小学校第3学年、第4学年対象の外国語活動の内容に、「聞くこと」「身近で簡単な事柄に関する短い話を聞いておおよその内容が分かったりする活動」に関して、身近で簡単な事柄に関する短い話とは、中学年の児童が興味・関心を示すような自分のことや身の回りの人や物、学校生活などに関する短い話を指しており、短い話のおおよその内容を推測する活動として、絵本を活用した読み聞かせが有効であると述べている。「聞いて分かった」という喜びや達成感を味わわせることが重要であり、絵本には具

体的な場面設定があり、理解を促す手立てとしてイラストがあり、「聞いて分かった」という喜びや達成感を味わわせるための手段として、絵本が適切な教材であると述べられている（文部科学省 2017：29-30）。

また、小学校第5学年、第6学年対象の外国語科の内容に、「読むこと」「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を、絵本などの中から識別する活動」という事項が挙げられている。この事項では、絵本には内容理解を促すための絵や写真がふんだんに使用されているということのほか、主題やストーリーがはっきりしているという特徴があり、絵本には、同じ表現が意図的に繰り返し示されているという特徴もある、と述べられている。また、絵本の読み聞かせで、児童とやり取りをしながら、簡単な語句や基本的な表現を文中から見つけさせる活動が示され、児童とのやり取りの中で、絵ではなく、徐々に文に注目させる方法等が述べられている（文部科学省 2017：105）。このように、学習指導要領の中でも「聞くこと」「読むこと」の活動で絵本を活用することが有効な支援だと述べられている。

絵本を活用する意義について、衣笠（2013：97-98）は以下のような点を指摘している。①ある程度まとまりのある英語を聞くことを通して、英語特有の音・リズム・抑揚などに触れることができ、英語の文法構造に無意識のレベルで触れることができる。②イラストと理解可能なことばをヒントに前後関係などから、未知の表現や語彙の意味を類推・推測する力や、大意をつかむ力を育む。③王様や蛙など日本の絵本にはあまり扱われないモチーフや、イラストに描かれる事物・自然・建物・衣服・生活習慣などを通して異文化に触れ、異文化への興味・関心が高まる。④外国の民話など、その国特有の物語の展開を通して異なる世界観や価値観に触れ、無意識のレベルで異文化の深層に触れることができる。⑤中・高学年になると、文字にも興味に向くようになり、音と文字とのつながりに興味・関心が高まる。また文字を意識しながら、指導者について何度も繰り返しているうちにしだいに音読の力が育つ。⑥絵本にはメッセージ性の高いものも多く、こころの成長を助ける。

以上のように、短いやり取りが中心の会話だけではなく、絵本を活用することによって、ある程度まとまりのある英語を聞くこととなり、英語特有の音・リズム・抑揚などに触れることができ、英語の文法構造に無意識に触れることができる。また、日本とは異なる世界観や価値観に触れることができ、異文化への興味・関心を高めることができ、メッセージ性の高いものも多く、こころの成長を助ける。

また、英語絵本の読み聞かせにおいて指導者がどのような発話をするかを分析した萬谷（2009）の研究では、①子どもの発話を引き出す問いかけ ②recast（言い直し）などを通して正しい英語表現を印象付ける発話 ③子どもの発話意欲を促すための褒め言葉など、情緒面を重視した働きかけの三つの談話手法が用いられていることが明らかにされている。そして、学級担任による絵本読み聞かせは、児童の自発的な発話を引き出し、児童の理解を見極めながら、意味のあるやり取りができるという効用があることが報告されている。

小学校第3学年、第4学年対象の目標は、「外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目指す」（文部科学省：11）とあり、小学校第3学年、第4学年の外国語活動の目標は、「聞くこと、話すこと」であり、学級担任による絵本読み聞かせは、児童の自発的な発話を引き出すことができ、絵本の物語を「聞くこと」によって、児童の自発的な発話を促し、「話すこと」に繋がっていく。

絵本の読み聞かせについて、東（2017：97）も、絵本の読み聞かせは、話の内容を推測することや絵本に出てくる語彙や表現を文中から読もうとすること以外に、ストーリーを楽しみながら、児童の言いたいという気持ちを育むための指導手法としても活用できると述べている。

絵本を教材として使用することにより、ある程度まとまりのある英語を聞くことを通して、英語特有の音・リズム・抑揚などに触れることができ、英語の文法構造に無意識のレベルで触れることができる。イラストと理解可能なことばをヒントに前後関係などから、未知の表現や語彙の意味を類推・推測する力や、大意をつかむ力を育むことができる。異文化に触れ、異文化への興味・関心が高まる。異なる世界観や価値観に触れ、無意識のレベルで異文化の深層に触れることができる。中・高学年になると、文字にも興味に向くようになり、音と文字とのつながりに興味・関心が高まり、文字を意識しながら、指導者について何度も繰り返しているうちにしだいに音読の力が育つ。絵本にはメッセージ性の高いものも多く、こころの成長を助ける。また、学級担任による絵本読み聞かせは、児童の自発的な発話を引き出すことができ、絵本の物語を「聞くこと」によって、児童の自発的な発話を促し、「話すこと」に繋がっていく。

### 3. 絵本を選ぶ視点

絵本を教材として使用することにより、英語特有の音・リズム・抑揚などに触れることができ、英語の文法構造に触れることができる。イラストと理解可能なことばをヒントに、未知の表現や語彙の意味を類推・推測する力や、大意をつかむ力を育むことができる。異文化への興味・関心が高まり、異なる世界観や価値観に触れることができ、文字にも興味に向くようになり、音と文字とのつながりに興味・関心が高まり、文字を意識しながら、指導者について何度も繰り返しているうちにしだいに音読の力が育つ。絵本にはメッセージ性の高いものも多く、こころの成長を助ける。また、学級担任による絵本の読み聞かせは、児童の自発的な発話を引き出すことができ、絵本の物語を「聞くこと」によって、児童の自発的な発話を促し、「話すこと」に繋がっていく等という以上の点から、絵本は有益な教材である。

それでは、外国語活動・外国語でどのような絵本を選べばよいのか、リクソン（2013：260-264）は、良い物語の4つの特徴を、具体的に絵本を示しながら述べている。

#### ①良い物語は子どもの認知の枠を拡げ、異なった視点を提供する

『大きなかぶ（*The Enormous Turnip*）』は、どんなささいなことでも役に立つという、とても大切なことを、子どもたちに気づかせてくれる。ネズミが列の最後尾で引っ張らなければ、かぶは地面から抜けなかったのである。おじいさんやおばあさんや、ほかの動物が総動員で引っ張ってもだめだったものが、たった一匹のか弱いネズミが加勢したことで、それが可能になったのである。

『魔女のウィニー（*Winnie the Witch*）』は、ウィニーは壁も家具も何から何まで真黒な家に住み、黒ネコのウィルバーを飼っている。ウィニーは、床と同じ色のウィルバーにいつもつまずいてばかりいるので、最初、ウィニーは、自分の飼いネコにつまずかないようにするために、魔法を使って彼の毛を違う色に変えてしまう。しかし、そのことが、ウィルバーにたいへん大きな屈辱感を与えてしまう。ところが、やがて、ウィニーは別の視点で物事を見るようになる。結局、黒い家よりも、本来の

黒い毛並みのウィルバーが幸せでいることのほうが大切だということに気づき、家を変えることにする。すると、もとの黒いネコに戻ったウィルバーは、明るい色どりを施した家の中では、かえって目立つようになった。

## ②良い物語は子どもたちに物語の筋を予測させる

良い物語は、読み進むうちに、次に何が起こるのかという話の「先」が予測できるようになっている。このように、あらかじめ予測を立てることは、リスニングでもリーディングでもとても大切なストラテジー（方略）であり、実生活でも役に立つ。語りながら、「間（pause）」をとったり、すぐ答えをあかさずに、ときには、子どもたちに直接、質問を投げかけたり、さまざまな方法で推測の糸口を与えてやることができるのである。予測が外れることもあるが、優れた物語は読者をうまくあざむくものである。しかし、たとえ外れることがあっても、子どもたちがいろいろな意見を述べてくれたことをほめてやるのが大切である。そうすることによって、子どもたちは、予測してみるのはいいことだということが実感できる。

以下は、イギリスの小学校で『小さなジンジャーブレッドマン（*Little Gingerbread Man*）』という物語を使った授業の一例である。

先生：The Little Gingerbread Man jumped on to the fox's nose.

[と、物語の一節を読んだ後に]

Do you think he's safe there?

[と、子どもたちに問いかけると、子どもたちの反応は、]

子ども：No!

[その子どもの反応に対して先生は]

先生：Why not?

[と、更に子どもに問いかける。]

子ども：'Cause he's going to eat him-the gingerbread-up now. 'Cause he... 'cause I got a story about that and I ... he's going to eat the gingerbread up.

[子どもは、ジンジャーブレッドマンがキツネに食べられてしまうと心配する。]

先生：Oh, no! So he shouldn't have trusted the fox?

(そうなんだ！じゃ、ジンジャーブレッドマンは、キツネなんか信じてはいけなかったんだ？)

子ども：No.

(うん、信じちゃ、ダメだよ)

先生：Oh. Er. Let's see what's going to happen.

(そうか、じゃ、どうなるか見てみよう) [と、子どもに声を掛け、物語に戻る。]

ときには、物語の展開を予測するのに、母語で考えなければならないことがあるかもしれないが、子どもたちが物語の内容さえ理解していれば、先生が必要に応じて英語で言い直せばよいのである。このように学習者の発言を別の表現で言い表すことを「言い直し（recast）」と言う。

## ③良い物語は子どもの情動的 [想像的] な側面を伸ばす

自分の住んでいるところとは違う世界は、子どもにとってとても魅力がある。だからこそ、物語によ

る学習が、子どもの動機付けに役立つと言われている。物語を聞くことで、いろいろな登場人物の目を通して世界を見ることは、とても有意義な経験となる。物語は子どもたちを自然な形で「脱中心化（dencentring）」－他人の立場で物事を見て、自己中心的（egocentric）な見方から脱却すること－に導くことができる。

『3匹のヤギのガラガラドン（*The Three Billy Goats Gruff*）』での子どもとのやり取りを以下のよう

先生：How do you think the Big Billy Goat's feeling? Look at its face. How do you think?

（Big Billy Goat はどんな気持ちかな？ ヤギの顔を見てごらん。みんな、どう思う？）

子ども：Sad.（悲しそう）

[子どもの反応に共感しながら、更に子どもに問いかける。]

先生：He looks a bit sad. I wonder why they're feeling sad. Why do you think they might be feeling sad?（そうだね、みんな、すこし悲しそうだね。何で悲しいのかな？）

子ども：Because they're hungry?（二人とも、おなかがすいているからかな？）

先生：Because they're hungry. I think you're right.

（おなかがすいているからなのか。きっと、そうだね。）

このように、子どもたちは登場人物に興味を持つと、原作を飛び超えて、新たにエピソードを創作したり、自分たちで話の続きを作ってしまうこともある。

#### ④良い物語はことばの上達を促す

物語を利用することには、ことばの上達という観点から次の3つの利点が挙げられる。

- a) 物語を聞かせることは、単なる受動的なリスニングの練習というよりも、むしろ、子どもたちには、指導者とのインタラクションの機会となります。指導者が物語を語りながら、子どもたちに注意を払い、アイ・コンタクトをとったり、ときには話を中断して、彼らが理解しているかどうかを確かめ、理解が不十分と思われるときにはくり返して、話の流れに戻す－このような読み聞かせのプロセスを通して、指導者は子どもたちのリスニングを手助けしているばかりではなく、英語であれ、日本語であれ「聞き上手、話し上手」になるためにはどうすべきか、というメッセージを子どもたちに暗黙のうちに伝えているのである。
- b) 子どもたちの実生活で、母語で聞く物語が、おそらく長い談話（discourse）に触れる最初の経験となるはずである。このように物語は、文字で読むにせよ耳で聞くにせよ、全体がまとまった形で、大量にことばに子どもたちを「晒（さら）すこと」ができる。そういう意味で、読み聞かせは「子どもにやさしい言語教育」の機会を提供してくれる。言い換えれば、物語は完全な談話であり、最初から最後までばらばらに散らばった単文の集合体ではない。物語には、語彙や文法的に相互に関連性を持つ要素と呼応し、文章全体にまとまりを持たせる働きをする結束性（cohesion）を示す例が多く含まれている。たとえば、すでに述べられている登場人物を指す he や she などの代名詞とか、first, next, then のように物事の順番を示す標識（marker）などの事例に、自然な形で触れることができる。
- c) 良い物語は決まったフレーズのくり返し（refrain）が多い。

『ひよこのリキン (*Chicken Licken*)』『大きなかぶ (*The Enormous Turnip*)』『王様とネズミとチーズ (*The King, the Mice, and the Cheese*)』では、同じフレーズがくり返される。

読み聞かせが始まって、子どもたちが物語の世界に「引き込まれて」くると、彼らはくり返し出てくるフレーズを、ごく自然に口ずさむようになる。これらのフレーズは、読み聞かせの活動の重要な部分を占めているが、同時に、子どもたちがいろいろな形で利用できるような、ことばのデータベースとしての役割も持っている。

ほかにも、必ずしも規則的、意図的にくり返されるフレーズではないが、物語の一部になっており、子どもたちが自然に口ずさみ、別の状況や場面でも使えるようなものがある。

同じフレーズのくり返しは、同じ出来事のくり返しにもつながる。子どもに人気のある物語では、同じ出来事とか類似の出来事が、話の結末まで何度もくり返し起こるタイプのものがある。子どもたちは、たちまちこれらのフレーズに慣れ、指導者が、次に何が起こるか推測しようとする。この段階に至ると、子どもたちは、ことばと概念の両面で発達を遂げていると言える。

以上のことを踏まえると、東 (2017: 97) は、Ellen Stoll Walsh の *Mouse Paint* が、「②良い物語は子どもたちに物語の筋を予測させるに当たる」と述べている。*Mouse Paint* は、いたずら好きの三匹の白いネズミがペンキで遊んでいるうちに赤、青、黄色のペンキに染まってしまう。赤いペンキに染まったネズミが青いペンキの上でダンスすると紫のネズミになる。青色+黄色、黄色+赤色のたし算を知っている子どもたちは、次のページでネズミが何色になっていくのかを予測しながらお話の展開に興味を示す。カラフルになり、目立ちすぎるネズミたちはネコに襲われないようにどうするか、頭を働かせる。最後はお風呂に入り、元の白いネズミに戻るという物語で、物語の展開を推測しながら楽しめる絵本であると述べている。また、東 (2017: 97-98) は、Leo Lionni の *A Color of His Own* は、「③良い物語は子どもの情動的 [想像的] な側面を伸ばす」に当たると述べている。レモンの上では黄色に、紫の木の上では紫色に変わってしまうカメレオンは、自分自身の色を持ってないことを悲しむが、一匹のカメレオンに出会う。そして、ずっと一緒にいたら二匹は同じ色でいられることを教わる。カメレオンは外見の色が変わっても、変わらない心を持つことが大切であるということに気付く。また、「④良い物語はことばの上達を促す」に当てはまる絵本として、Nick Sharratt の *Ketchup on Your Comflakes?* を挙げている。*Ketchup on Your Comflakes?* は、“Do you like ~?” の導入に最適な絵本である。リング綴じになったこの絵本は“Do you like Ketchup”が上部、“on your conflakes?”が下部というように、各ページ上下に分かれていて、どちらかのページをめくって思いがけないナンセンスな組み合わせになる仕組みである。読み聞かせをしていて人気のある組み合わせは、“Do you like jam on your toothbrush?”や“Do you like ketchup on your head?”などである。子どもたちは二つの絵の組み合わせを楽しみながら、“Yes, I do.” “No, I don't”と好き嫌いを伝えることができるようになる。“Do you like ~?”の質問への応答が自然にできる場面設定を作ってくれる良書であると述べている。

また、以上の視点から、外国語活動・外国語科の教材として良いその他の物語を考えると、「④良い物語はことばの上達を促す」に当てはまる絵本は、Eric Hill の *Where's Spot?* である。これは、日本

では、『コロちゃんはどこ?』という題名で知られている絵本である。この絵本は、母犬が子どもを探す仕掛け絵本で、母犬が子どもを探し、“Is he behind the door?” と言い、ドアを開けることができるしかけとなっている。ドアを開くと熊に“no”「いないよ」と言われるのである。このように、いろいろな場所が開く仕掛けになっていて、色々な動物に“no”と言われるのである。子どもたちは、色々なところが開く仕掛けを楽しみながら、今度はどんな動物が隠れているのか、楽しみながらページを見るのである。この絵本は、“Is he ~?” のフレーズの繰り返しで同じ出来事の繰り返しであり、たちまちこれらのフレーズに慣れ、次に何が起こるか、子どもたちは推測しようとするであろう。この段階で、子どもたちは、ことばと概念の両面で発達を遂げていると言えるのである。また、“Is he in the piano?” と母犬が言いながらピアノの中をめくり、ピアノの中を覗いたり、“Is he in the box?” と母犬が言いながら箱の中をめくり、箱の中を覗いたりするので、子どもたちは、“in” の意味も何となく分かってくるのではないだろうか。また、“Is he under the bed?” と母犬が言いながらベッドの下をめくり、ベッドの下を覗き込んだり、“Is he under the stairs?” と母犬が言いながら階段の下をめくり、階段の下を覗き込んだりするので、子どもたちは、“under” の意味も何となく理解できるのではないだろうか。

「②良い物語は子どもたちに物語の筋を予測させる」「③良い物語は子どもの情動的 [想像的] な側面を伸ばす」に当てはまる物語の1つに、Leo Lionni の *Little Blue and Little Yellow* がある。ママにお留守番をするように Little Blue は言われたが、親友の Little Yellow の家に行ってしまう。Little Yellow の家は留守で、Little Blue は Little Yellow を探し回る。Little Blue と Little Yellow が再会した時、二人は喜んで抱き合う。抱き合うと二人は緑になる。緑になった後も二人は緑のまま遊び続け、疲れてそれぞれの家に帰るが、緑になっているので、それぞれの親から拒否され、家に入れてもらえない。『大阪千代田短期大学紀要』第46号で述べたように、授業でその箇所にくると、一旦読み進めることを止めて、子どもが家に入れてもらえない悲しみ、恐怖を伝え、これからの展開を学生に想像させる。物語と違う展開になっても構わないことを学生に伝え、自由に考えさせると色々なストーリー展開を学生は考える。「二人は緑として生きていき、緑の子どもも生まれる」「緑の親を見つけ、緑の親に育てられる」「二人は喧嘩をすると、青色と黄色に戻る」「坂から転げ落ち、青色と黄色に戻る」「二人は違う方向に体をひっぱると、青色と黄色に戻る」等様々なストーリー展開を考え、興味深い(鯉坂 2017)。このような学生とのやり取りを加え、物語の予測を促し、学生の次の物語展開への期待感を高めている。これは、子どもたちにも同じことが有効だと思われる。意識的に物語を読むことを止め、「間 (pause)」をとり、すぐ答えをあかさずに、子どもたちに直接、質問を投げかけることによって、子どもの想像力をかきたてる。予測が外れることもあるが、外れることがあっても、子どもたちがいろいろな意見を述べてくれたことをほめてやることによって、子どもたちは、自由に想像することはよいことだということが実感でき、児童の自発的な発話を促すこととなる。子どもたちも Little Blue と Little Yellow の悲しみに思いを馳せ、共感し、ストーリー展開を想像するに違いない。「間 (pause)」をとることによって、物語の予測を促し、期待感を高める効果がある。また、Little Blue と Little Yellow は、登場人物に顔が描かれていない。1つずつの形が微妙に異なる単なる色の丸である。顔を描かない、姿・形も微妙に異なる円で表すことにより、子どもが自由に自分の好きな Little Blue、Little Yellow を頭の中で



創作できるようになっている。ママもパパも他の登場人物も顔が描かれてないので、子どもの好きな人物像にできるのである。同じ登場人物の丸も、Little Yellow に走り寄る Little Blue の丸の形も背が斜めであったり、疲れた時は丸がぺちゃんこだったり、形も少し違う。このような描き方で、走っている姿も、Little Yellow を見つけ、喜び勇んで、Little Yellow に駆け寄る Little Blue の姿を子どもは自由に思い描くだろうし、遊び疲れてぺちゃんこになっている緑になった Little Blue と Little Yellow の姿を子どもは自由に思い描くであろう。その他、Little Blue と Little Yellow が、他の子どもたちとかくれんぼで遊んでいるところが描かれているが、これもちぎり絵のような丸などの図形で表されているので、Little Blue、Little Yellow や他の子どもたちの誰が鬼で、どのようなところに隠れ、どのようにかくれんぼをしているのかを子どもが想像できるようになっている（鯨坂 2017）。このような点も、「子どもの想像的な側面を伸ばす」ところである。

「①良い物語は子どもの認知の枠を拡げ、異なった視点を提供する」「④良い物語はことばの上達を促す」に当てはまる物語は『ねえ、どれがいい？（*Would you rather...*）』である。この物語は、妖精が魔法をかけるのを手伝いたい、小人の宝探しを手伝いたい、魔物のいたずらを手伝いたい、魔女のシチューづくりを手伝いたい、サンタクロースのプレゼント配りを手伝いたい等という選択肢から、自分の好きな選択肢を選ぶものである。“*Would you rather...～ or ～*” のフレーズの繰り返しで、しばらく読むと、このフレーズに子どもたちはすぐ慣れるであろう。絵の助けを借りて、いくつかの選択肢から自分の好きなもの、あるいはまだ自分が耐えられるものを選ぶのだと理解できるはずである。筆者は授業で学生にこの物語を読み聞かせ、手を挙げさせる。“*Would you rather be made to eat...（どれなら、食べられる？）*” の項目は特に学生が興味を持つ。選択肢は “spider stew（くものシチュー）” “slug dumplings（かたつむりのおだんご）” “mashed worms（虫のおかゆ）” “or drink snail squash（あるいは、へびのジュースを飲むか）” である。どれならまだ食べられるか、学生はそれぞれ考え出し、意見を言い合い出す。手を挙げさせると、答えは様々なものとなる。そこで、学生たちは、自分だったら絶対に選ばない選択肢を選んでる友人たちに驚き、感想を言い合うのである。その際の授業の感想にある学生が書いていたことは、この絵本を前から自分は知っていたが、自分と違う意見や反応があったり、お互いに意見を言い合ったので、自分一人で読んでた時よりも、みんなでこの絵本を読んだ方が面白かったというものであった。この感想で、この絵本は一人よりも多くの子どもたちと一緒に読む方が面白い本だということに気付いた。この絵本で、自分の意見を言うために児童の自発的な発話を促すこととなり、自分とは違う感覚や意見をもつ人の存在を認識し、それをお互いに楽しみ、意見を言い合うことができる貴重な絵本である。

また、Leo Lionni の『スイミー（*Swimmy*）』は、「①良い物語は子どもの認知の枠を拡げ、異なった視点を提供する」に当てはまる。赤い小さな魚たちの中に黒い魚は Swimmy だけだった。一緒にいた仲間の赤い魚たちは全て、まぐろに食べられてしまう。絶望を感じる Swimmy だが、海にはすばらしいものが他にも多くあると気付く。その後、仲間の赤い魚の群れを見つけ、外には素晴らしい世界があるから見に出てくるように言うが、赤い魚たちは大きな魚に食べられてしまうと岩陰から出てこようとしな。そこで、Swimmy は考え、皆と一緒に泳ぐことを教えて大きな魚に見せることを提案し、Swimmy は大きな魚の黒い目となり、大きな魚たちを追い払うのである。この物語から、コン

プレックスがあっても視点を変えると自分の強みになること、人と違うことは素晴らしいこと、絶望を感じるがあっても素晴らしい世界があること、危機的な状況でも諦めず考えることで乗り切れること等を感じ取ることができるであろう。Swimmyには、Swimmyが岩陰に隠れる赤い魚たちに外の世界を見るよう勧める箇所の“see”は、文字が大きくなり“see”は強調されている。Swimmyが諦めずに考えるところには、“think”の字体は他の文字より大きく書いてあり、考えることの重要性が強調されている。日本語版にはこのように強調されているようなところはない。読み聞かせの際、この“see”や“think”を強調して読むと、より危機的な状況でも見て分析し、諦めず考えることの重要性を感じ取ることができるであろう。『スイミー（Swimmy）』は、小学校第2学年の国語教科書に掲載されていることがあり、小学校第3学年で『スイミー（Swimmy）』を知っている可能性も高く、英語が理解できなくても物語を知っているので、英語の内容を予測しやすい。子どもたちは、『スイミー』が英語の絵本であることを知ると、驚き、興味をもつことだろう。

また、「②良い物語は子どもたちに物語の筋を予測させる」にあてはまる絵本に、Eric Carleの『はらぺこあおむし（The Very Hungry Caterpillar）』がある。The Very Hungry Caterpillarは、小学校入学前に幼稚園、保育所、こども園等で非常に人気があり、慣れ親しんだ絵本であるので、子どもたちは物語の予測がしやすい。また、慣れ親しんだ絵本であるので、自分の知っている絵本が紹介された喜びと自分の知っていた絵本が英語の絵本であることに気付き、驚き、関心をもつであろう。筆者が授業で、The Very Hungry Caterpillarを紹介すると、自分の知っていた絵本が英語の絵本であることに驚く学生がいる。子どもたちは、自分が日本語で慣れ親しんだ絵本の英語を聞き、意味も推測しやすい。

以上のような視点から、小学校で教材として使用することに相応しい絵本を選ぶことができる。

#### 4. まとめと今後の課題

児童文学（絵本）を活用する意義は、ある程度まとまりのある英語を聞くことを通して、英語特有の音・リズム・抑揚などに触れることができ、英語の文法構造に無意識のレベルで触れることができる。イラストと理解可能なことばをヒントに前後関係などから、未知の表現や語彙の意味を類推・推測する力や、大意をつかむ力を育む。日本の絵本にはあまり扱われないモチーフや、イラストに描かれる事物・自然・建物・衣服・生活習慣などを通して異文化に触れ、異文化への興味・関心が高まる。外国の民話など、その国特有の物語の展開を通して異なる世界観や価値観に触れ、無意識のレベルで異文化の深層に触れることができる。中・高学年になると、絵本の文字にも興味に向くようになり、音と文字とのつながりに興味・関心が高まる。また文字を意識しながら、指導者について何度も繰り返しているうちにしだいに音読の力が育つ。絵本にはメッセージ性の高いものも多く、こころの成長を助ける。また、学級担任による絵本読み聞かせは、児童の自発的な発話を引き出し、意味のあるやり取りができるという効用がある。これは、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』の小学校第3学年、第4学年対象の外国語活動の目標は、「外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目指す」とあり、小学校第3学

年、第4学年の外国語活動の目標は、「聞くこと、話すこと」であり、学級担任による絵本読み聞かせは、児童の自発的な発話を引き出すことができ、絵本の物語を「聞くこと」によって、児童の自発的な発話を促し、「話すこと」にも繋がっていくのである。

また、小学校第5学年、第6学年対象の外国語科の目標は、「外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成することを旨とする」とある。小学校第3学年、第4学年の外国語活動の目標は、「聞くこと、話すことの言語活動を通して」であるが、小学校第5学年、第6学年で外国語科として教科となる際の目標には、「読むこと」「書くこと」が加わる。目標に「読むこと」「書くこと」加わる際、絵本を教材に使うことはとても有効だと思われる。

絵本は、小学校入学前から子どもたちにはなじみのあるもので、原書は英語である絵本を日本語の絵本として知っている場合もある。小学校入学前から慣れ親しんでいる絵本を教材として使うことにより、英語の世界にスムーズに入っていくことができ、小学校第3学年、第4学年で慣れ親しんでいる絵本の読み聞かせから、英語を聞き、子どもの自発的な発話を促すことができる。また、小学校第3学年、第4学年で「聞くこと、話すこと」中心だった授業内容から、小学校第5学年、第6学年で絵本に書いてある文字を意識することにより、「読むこと」「書くこと」にスムーズに移行していくために使用できるのである。加えて、絵本はメッセージ性が高く、こころの成長を促す。このように、児童文学（絵本）を小学校の外国語活動・外国語科で使用することは、有効な面が多い。

それでは、どのような児童文学（絵本）を小学校の外国語活動・外国語科で使用すればよいか、児童文学（絵本）を選ぶ視点は、「良い物語は子どもの認知の枠を拡張し、異なった視点を提供する」「良い物語は子どもたちに物語の筋を予測させる」「良い物語は子どもの情動的[想像的]な側面を伸ばす」「良い物語はことばの上達を促す」という視点があり、その視点にあてはまる児童文学（絵本）を挙げた。また絵本を選ぶ視点として、小学校入学前に幼稚園、保育所、こども園等で人気があり、慣れ親しんだ絵本を挙げている。慣れ親しんだ絵本では、子どもたちは物語の予測がしやすい。また、慣れ親しんだ絵本なので、自分の知っている絵本が紹介された喜びと自分の知っていた絵本が英語の絵本であることに気づき、驚き、英語に関心をもつであろう。子どもたちは、自分が日本語で慣れ親しんだ絵本の英語を聞き、意味も推測しやすいのである。

しかしながら、児童文学（絵本）は他に多くあり、検討が必要である。また、小学校の外国語活動・外国語科で活用することが有効な児童文学の中で、*Mother Goose*に触れることができなかった。今後、*Mother Goose*についても検討していきたいと考えている。また、小学校の外国語活動・外国語科については他にも検討すべきことが多くあり、今後、深めていきたい。

#### <注>

- 1) 厳しい挑戦の時代を迎えることを危惧し、平成26年11月には、文部科学大臣から新しい時代にふさわしい学習指導要領等の在り方について中央教育審議会に諮問を行い、平成28年12月21日に「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を示した。こ

の答申を踏まえ、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、平成 29 年 3 月 31 日に学校教育法施行規則を改正するとともに、幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校学習指導要領を公示したと『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』の第 1 章に経緯が記載されている。

2) 平成 29 年度は小学校第 5 学年、第 6 学年で行われていた週 1 コマ、年間 35 時間の外国語活動が、平成 30・平成 31 年度は小学校第 3 学年、第 4 学年で年間 15 時間の外国語活動、小学校第 5 学年、第 6 学年で週 1.4 コマ、年間 50 時間の外国語活動となる。平成 32 年からは、すべての小学校において小学校第 5 学年、第 6 学年で外国語（英語）が教科となり、週 2 コマ、年間 70 時間の授業を受けることになっている。第 3 学年及び第 4 学年は、週 1 コマ、年間 35 時間の外国語活動の授業を受けることとなっている（文部科学省（2018）「小学校 移行措置関係規定」『小学校 学習指導要領（平成 29 年告示）』 東洋館出版）。

3) 文部科学省「小学校英語活動実施状況調査」（平成 19 年度）

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920/001.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/001.htm), 2018.9.15

#### <引用文献>

鯨坂はるよ（2017）「幼児教育学科における英語教育実践」『大阪千代田短期大学紀要』 第 46 号

John Burningham (1999) *Would you rather...* Red Fox

Eric Carle (2002) *The Very Hungry Caterpillar* Puffin Books

樋口忠彦、加賀田哲也、泉恵美子、衣笠知子（2018）『新編 小学校 英語教育法入門』研究者

Eric Hill (1998) *Where's Spot?* Penguin Books

小宮富子（2009）「小学校における英語活動導入の問題点と指導法について」『岡崎女子短期大学紀要』 第 42 号

Leo Lionni (1995) *Little Blue and Little Yellow* A Mulberry Book

Leo Lionni (1963) *Swimmy* A Borzoi Book

萬谷隆一（2009）「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要』教育科学編 第 60 巻第 1 号

文部科学省（2018）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』開隆堂

文部科学省「小学校教員養成課程 外国語（英語）コア・カリキュラム」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/\\_\\_\\_/1384154\\_3.PDF](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/___/1384154_3.PDF), 2018.9.15

シーラ・リクソン、小林美代子、八田玄二、宮本弦、山下千里（2013）『チュートリアルで学ぶ 新しい「小学校英語」の教え方』玉川大学出版部

東京学芸大学「英語教員の英語力・指導力教科のための調査研究事業」

[http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/28file/report28\\_all.pdf](http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/28file/report28_all.pdf), 2018.9.15

鳥飼玖美子（2018）『子どもの英語にどう向き合うか』NHK 出版

吉田研作、小川隆夫、東仁美（2017）『小学校英語 はじめる教科書』mpi 松香フォニックス